

国語

注 意

- 1 問題は 1 から 4 までで、16 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 自然に対して畏怖の念をもつ。
- (2) 時代を遡るようにして調べる。
- (3) 野生の動物が掘った畑の穴を土で充填する。
- (4) お客様からお褒めの言葉を賜る。
- (5) 今月からリョケンの電子申請が可能となった。
- (6) 親切にすることはビトクの一つである。
- (7) 彼の発言はスジが通っている。
- (8) 石炭の Koumyaku を掘り当てる。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

社会人・大学生・高校生・中学生の混成チームによる都道府県対抗の駅伝大会で福岡チームの二区を走る中学生の山野海人は、たすきを手にしたまま走り出していた。控え選手の斎藤湊は、このままではチームが失格になることに気付いて沿道を走り海人に伝えた。

斎藤湊は、第一中継所から約二百メートルの地点で、海人の背中を見送っていた。

間に合ってよかった。

息は切れていたが、今、感じていることはそれだけだ。もしかしたら、福岡は失格になるところだったかもしれない。

中継所で海人の準備を手伝った湊は、コースの少し先まで走って、海人を待ち受けていた。中継所付近は人が多すぎてよく見えないので、沿道に隙間ができているところまで先回りしていたのだ。

ごちゃごちゃしたかたまりの中から、海人は一番に飛び出してきた。快調な走りだった。だんだん近づいてくる顔にも強張りがなかったが、逆に湊の顔のほうがだんだん強張ってきた。いつまでたっても、海人がたすきをかけないのである。

後続の選手たちは、すでににかけてしまっているというのに、一人だけ、にぎりしめたままなのだ。

まさか。

胸がきゅつとしめつけられたようになった。その瞬間、湊は走っていた。

「山野っ、山野っ。」

たすきは大事だ。着実に受け渡さなければならぬし、走行中は正しく装着していなければならぬ。

「たすき、たすきっ。」

沿道を全力で走りながらの絶叫に、気がついた海人がようやくたすきをかけたときは、全身から力が抜けた。

よかつた。

(1) 走行距離にすると数十メートルくらいだったろうが、フルマラソンを走りきったように消耗していた。

スタート地点から、海人のテンションがかなり高いことは気がついてきた。もちろん、試合前は、気分が乗っているに越したことはないが、湊は少しばかり心配をしていた。

なにか、やらかさなければいけないけど。

「40番だぞ。」

だから、もう一度スタート前には釘を刺しておいたのだが。

二区は中学生のエース区間だ。最終選考の結果は、佐々木和、山野海人、斎藤湊の順で、それぞれに三秒ほどの差がついた。本来なら、佐々木和が走るころだが、熊沢監督が選んだのは、海人だった。

区間が発表されたときは、疑問も感じたが、それは海人のサポートをしてみても、解消された。海人はまったくびくついてなかったのだ。それどころか、走れることが楽しみでしようがないようだった。

駅伝の前半は、勢いが大切だ。その意味では海人のほうが佐々木和よりも適している。佐々木のほうがタイムは勝るが、海人の勢いにはかなわない。

ましてや自分には無理だったろうとも思える。高校ナンバーワンの沢

田からもらったたすきを、スター選手水島に渡すなんて、湊は考えただけで身がすくんだ。

海人と自分の差は三秒ほどだったが、気持ちのほうにはもっと差がついていた、と今になって湊は思う。現にあんなアクシデントがあったにもかかわらず、海人は元気に走っていった。

なんて強いハートなんだ。

沿道に立ちすくむ湊の胸を、後続の選手たちがぞくぞくと走り去っている。

でもやっぱり、走りたかったかな。

(2) 選手たちの背中を見ていると、ほんの小さな未練が、ちくつと胸を突ついた。

と、そのとき、

ブーブーブー。

ポケットに入れていた、スマホが震えた。取り出すと電話の着信で、斎藤正志と表示が出ている。湊は耳にスマホを押し当てた。

「お父さん？」

「おお、湊。速かったな。」

「テレビに映ってたの？」

B 湊は思わず首をすくめる。

「ああ、映ってたぞ。沿道を誰かが走ってきたから、そっちのほうに目が行ったんだ。よく沿道を一緒に走ってる子どもとかがいるじゃないか。それにしても速いなと思ったら、湊だったからびっくりしたんだ。」

父親の声は、はずんでいた。母と弟は、顧問の先生らと一緒に、広島まで応援に駆けつけてくれたが、父はテレビで応援していた。都市銀行に勤務している父は、現在東京に単身赴任中なので、今日のテレビ中

C 継を楽しみにしてくれていたのだ。

「じつは父さんも、彼がなかなかたすきをかけないのにやきもきしていたんだよ。たすきはかけないとまずいんだろ？」

恥ずかしさに湊の顔は熱を持ったが、電話の向こうの父親はうれしそうだ。

「うん。失格の対象になるらしいよ。」

湊は控え目だが、さりげなく自分の手柄をアピールしてみせた。離れている父に甘えたいような気持ちもあった。

「よく気がついたな。」

父はそんな気持ちを受け止めるようにほめてくれ、顔がくちやくちやになった。テレビカメラが周りにならないかと目を配ったが、大丈夫なようだった。

「うん。彼、ちょっとてんばってたから、心配してたんだ。」

湊には危なっかしい人に知らず知らずのうちに、注目してしまうところがある。それを父親も知っているようで、

(3) 「湊は、昔から注意深いからな。」

と、誇らしそうな声を出した。

「出られなくて残念だったけど。」

そこで初めて、やっぱり走る姿を見せたかったという思いがこみ上げてきた。こんなことで喜んでくれた父を、走って喜ばせてやりたかった。改めて悔しくなった湊に、

「出たじゃないか。」

父は大きな声をあげた。

「それに、走るよりも大きな仕事をしたじゃないか。湊が間に合わなかったら、彼は次までたすきを持ったままだったかもしれないぞ。そしたら

福岡チームは失格だったんだろ。」

「ま、まあね。」

さすがにそこまでの大げげはかまさないだろうが、あの海人ではその可能性も否定できない。

「かっこよかったぞ、湊。」

「ありがとう。」

(4) 湊は小さく微笑んで、電話を切った。が、それからが大変だった。着信音がじゃんじゃん鳴り始めたのだ。

「みーくん、よくやったね。」

「さすがは、斎藤だよ。」

「好感度あげあげだな。明日からもてるぞ。」

(4) テレビを見ていたらしい親戚や部活仲間やクラスメートが口ぐちにはめてくれたが、最後にかかってきた電話が、いちばん切実だった。

「ありがとうなあ。斎藤。お前のおかげで、全員が助かったよ。あのまま失格じゃあ、県人会にも合わせる顔がなかった。」

熊沢の声だった。監督控え室で、テレビを見ていたらしい熊沢は、
D 九死に一生を得たような声で言った。

「お疲れだったな。」

熊沢からの電話を切ると、澄川がそばに立っていた。

「さ、ゴールに先回りして、お前がつないだたすきを迎えてやろう。」

「はい。」

(5) 湊は、選手たちが走り去ったあとの道路を見やりながらうなずいた。走り集中しろよ。

海人に念を飛ばしながら。

(まはら三桃「白をつなぐ」による)

〔注〕 40番——ゼッケンの福岡チームの番号。

澄川——福岡チームのコーチ。

〔問1〕 走行距離(1)にすると数十メートルくらいだったろうが、フルマラ

ソンを走りきったように消耗しょうもうしていた。とあるが、この表現から

読み取れる湊の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア スタート前からいつもとは違う海人の様子が気になっていたのに注意を
しなかつたため、海人がたすきをかけないまま走り出したことに
責任を感じ、少しの走行距離でも精神的に消耗している様子。

イ たすきを手にしたまま選手たちの中から一番に飛び出してきた海人
を見て、試合中の体力やレース展開を考えていないようで心配になり、
短い距離を走っただけでも極度の疲労を感じている様子。

ウ たすきをかけなければならぬことを海人に知らせるために必死で
走っていたときは気持ちが張りつめていたが、海人が気付いたことで
安心し、緊張が解けて疲れがどっと押し寄せている様子。

エ たすきを手に持ったままでは失格になることを海人に伝えるために
疲れた体で無理に走り、海人がたすきをかけた後は一気に緊張から解
放され、今まで経験したことのない体力の消耗を感じている様子。

〔問2〕⁽²⁾ 選手たちの背中を見ていると、ほんの小さな未練が、ちくつと

胸を突ついた。とあるが、このときの湊の気持ちに最も近いのは、

次のうちではどれか。

ア 海人のサポートをする中で、海人は実力もあり走ることを心から楽
しんでいる上に度胸までもあることに気付いて自分との差異を感じた
が、やはり自分が走りたかつたという思いを抑えられない気持ち。

イ 海人は一番勢いがある選手で自分に勝ち目はなく、ましてやスター
選手にバトンを渡すというプレッシャーにも耐えられなかつたため、
選手として走ることから逃げてしまった自分を無念に思う気持ち。

ウ 海人を近くで見ていると、海人は実力もあり困難な状況でも走るこ
とを楽しむ余裕まであることに気付いたが、危なっかしい面もあるため
自分の方が走るのに適していたのにと納得しきれないでいる気持ち。

エ 海人にはタイムでも気持ちでも大きな差をつけられていたが、アク
シデントの後でも元気に走る海人の様子を見て、自分も試合に出たら
気持ちを強くもつてチームのために活躍できたのにと悔やむ気持ち。

〔問3〕「湊は、昔から注意深いからな。」とあるが、この表現から読

み取れる父の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 湊が試合で走ることができず落ち込んでいるため、ほめられる点を
探して声をかけることで元気を出してもらおうとしている様子。

イ 昔から変わることのない湊の周囲を注意深く観察することができ
る性格が大事な場面で発揮され、うれしさがこみ上げてきている様子。

ウ 昔から湊をよく理解しているため、試合で走る姿を父に見せられな
かった湊がかけてほしそうな言葉を選んでほめようとしている様子。

エ 湊の注意深く気が弱い性格がかえって良い方向に発揮され、チーム
が失格にならなかったことを自分のことのように喜んでいる様子。

〔問4〕湊は小さく微笑ほほえんで、電話を切った。とあるが、このときの「湊」

の心情に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 試合で走れないことに未練があったが、チームの危機を救うという
走る以上の大事な仕事をしたと父がほめてくれたため、サポート役に
回ったことがかえって自分にとっては幸運だったと感じている。

イ 自分の機転でチームの窮地を救うことができたということを経験で
父にさりげなくアピールしたところ、心からほめてくれたため、走る
ことができなかつた悔しさが消えて心が晴れ満足している。

ウ チームが失格にならないように懸命にサポートする姿を父もテレビ
で見えて喜んでくれたため、試合で走る姿を見せられなかつた悔しさを
父に悟られまいとあえて明るく見せようとしている。

エ 父と話していく中で試合に出られなくて悔しく残念な思いがこみ上
げてきたが、チームを救ったことが何よりも大きな仕事だったとほめ
てくれた父の言葉を受け止めてうれしく思っている。

〔問5〕 湊は、選手たちが走り去ったあとの道路を見やりながらうなず

いた。とあるが、このときの「湊」の様子として、最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 自分が機転を利かせたことでチームを支える役割を果たすことができたが、海人に対する心配をまだ抱えているため、海人が走りに集中してたすきをつないでくれることを祈っている様子。
- イ チームをサポートする役割を果たして安心し、仲間たちがゴールまでたすきをつないでくれることを信じつつ、海人がこのまま何ごともなく走ってくれることを願ひ応援している様子。
- ウ チームのために貢献することは試合で走ることができない湊の役割であり、たすきが無事につながった今、思い残すことは何もないのだと自らに言い聞かせようとしている様子。
- エ 自分の活躍でチームの危機を救って役割を果たし、心配することはなくなつたため、この先はこれから走る選手たちにすべてを任せてよいのだとチームの安泰を確信している様子。

〔問6〕 本文中の波線部A～Dの表現について述べたものとして適切な

ものを、次のうちから選べ。

- ア 胸がきゅつとしめつけられたようになった。は、湊がたすきをかけないまま走ってしまったっている海人に気が付き、試合が失格になるかもしれない不安でいっばいになっていることを表している。
- イ 湊は思わず首をすくめる。は、湊が試合のテレビ中継に映るという予想もしていなかった出来事に直面し、自分の行動の影響力の大きさに気が付いて驚きや焦りを感じていることを表している。
- ウ 「じつは父さんも、彼がなかなかたすきをかけないのにやきもきしていたんだよ。たすきはかけないとまずいんだろ？」は、湊の父が懸命に沿道を走る息子の姿を見て、離れて暮らしているため息子を助けてあげられないもどかしさを感じていることを表している。
- エ 「お疲れだったな。」は、澄川がもう少しで取り返しのつかなくなるところでチームの危機を救った湊に感謝しつつ、落ち着きを取り戻すために自身に強く言い聞かせていることを表している。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(①～④は段落番号である。*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

① 「よく生きるとはどういうことか」という問題について考えてみました。そのような問題について考える主体、そして何より「よく生きる」主体は、言うまでもなく「私」です。そのように考え、生きる主体は、他の誰でもないこの「私」です。「実存」する私です。「よく生きるとはどういうことか」という問いと、私が私であること、つまり私の「実存」とは深く関わっています。

② 「実存」という言い方をしましたが、この言葉が広く知られるようになったのは、それほど古いことではありません。もちろん哲学では、エッセンティア(essentia)の対概念としてエクシステンティア(existentia)という言葉が古くから使われてきました。前者が事物の「本質」、つまりそれが何であるかを言い表すのに対し、後者のほうは物が実際にあること、現実存在することを意味します。その意味を汲んで、現実存在、事実存在などと訳されています。短くして実存と言われることもありま

す。

③ しかしこの「実存」という言葉、そして「実存主義」という言葉が広く知られるようになったのは、戦後のことです。二〇世紀のフランスの思想家サルトル(Jean-Paul Sartre, 1905-80)の影響が大きかったと言えます。一九四五年に行われた講演「実存主義はヒューマニズムであるか」、そして翌年出版された『実存主義はヒューマニズムであるか』(邦訳は『実存主義とは何か』一九五五年)は、戦後の思想界に大きな影響を与えました。サルトルでは「実存」は、物が現実にあるという意味ではなく、人間の主体的なあり方を指す言葉として使われました。

④ サルトルは——*ハイデガーの哲学が踏まえられていますが——人間は未来にある自己を意識し、その未来に向かって自らを投げる、つまり「投^と企^き」する存在であると言います。人間が人間であるゆえんは、自らを投^と企^きする「主体」であること、「主体」として生きることにあります。この自らの投^と企^きに先だつて、私たちがかくかくしかじかでなければならぬと決定するのは何もないということをサルトルは強調します。つまり「実存」に先だつ「本質」は存在しないのです。私たちが物を、たとえば椅子を作る場合、それがどのようなものでなければならぬか、その「本質」のほうがまずあつて、それに従つて(あるいはそれに向かつて)椅子が作られます。しかし人間の場合は、自らを未来に向かつて「投^と企^き」するというのがまず先にあるのです。

⑤ このような意味で「私」は自らの未来のあり方を自分の決断で選び取ります。「私」は「どのように生きるか」という問題を決定し、自らを作りだす「主体」です。そのような意味で、サルトルは「主体性」こそがすべての始まりであると言います。

⑥ 一方でそれは、人間が「脱^だ自^じ的^{てき}」であるということでもあります。それは existentia の ex(く)からという前綴^{まえつづ}りが示すところでもありますが、人間は、いまあるところのものであるというよりも、むしろ、いまはないものになろうとするものです。そのことを指してサルトルは、人間は自由であると言います。「人間は自由そのものである」と言います。

⑦ しかし、それは逆に、人間が自由であることをやめることができないということでもあります。何かに寄りかかり、それに決断を委ねることとはできないのです。すべてが自らの責任においてなされるのです。サ

ルトルの言う「実存」は、「責任」とも深く結びついています。

⑧ サルトルが「実存主義」という言葉のもとにどのようなことを考えているかを見てみました。それは私たちが人間とは何か、自己とは何かを考える上で、非常に大切な点を指摘しています。しかし私とは何か、あるいは自己とは何かという問題は、この「主体性」ということでは尽くされないように思います。「自己」は、「主体性」という形で表面に現れるものでは尽くされないものを、そのうちにはらんでいるのではないのでしょうか。

⑨ 松浪信三郎まつなみしんざぶろうの『哲学以前の哲学』（一九八八年）がその問題を考える手がかりを与えてくれます。そこで松浪はフランスの哲学者デカルト（René Descartes, 1596-1650）のいわゆる“cogito, ergo sum”つまり「私は考える、ゆえに私は存在する」という命題について論じています。

⑩ デカルトはたとえば『方法序説』（一六三七年）や『省察』（一六四一年）といった著作のなかで、この“cogito, ergo sum”という哲学の第一原理について語りました。デカルトが哲学の方法としたのは、よく知られていますように、徹底的に疑うということでした。あらゆるものを疑い、疑わしいものをすべて取り除いていったあと、最後に確実な知識として残ったのが、この“cogito, ergo sum”という命題でした。つまり、私の周りにあるものは、本当に存在しているのか、すべて疑うことができるが、しかし、疑っている私自身の存在は疑うことができない。その意味で、私の存在こそが、すべての確実な知の基礎にあるということ。デカルトは主張したのです。³⁾ところが松浪は、この「私は考える、ゆえに私は存在する」というデカルトの第一命題を、自分であれば、「私は考える、ゆえに私は存在しない」と表現するだろうとこの『哲学以前

の哲学』で書いているのです（一八六）。たいへんおもしろい解釈だと思います。

⑪ なぜそのように考えるのか、ということですが、松浪は次のように説明します。デカルトは言わば「私とは何か」という問いに対して、「私は考える者である」、「あるいは「私は存在する者である」と答えたわけですが、そのように言われるときの「私」、つまり、「私とは……」という仕方、主語として最初に立てられる私も、また「……考える者である」というように答えのほうに、つまり述語のほうに登場する私も、ともに私が思考の対象としている私、対象として私の前に立てられた私であって、いま現に疑っている私、「実存」する私ではありません。この思考する私、実存する私は、この自問自答のなかで、言わばこちら側に引き下がっています。身を潜めていると言ってもよいでしょう。“cogito, ergo sum”と言われるとき、当の考えている私は、そのなかには現れていないのです。そのような意味で、「私は考える、ゆえに私は存在しない」と表現すべきではないかと松浪は言ったのです。

⑫ これは単なるレトリックではありません。大切な点を問題にしていると思います。そもそも「私」とは何でしょうか。私はどのようなときに「私」と言うのでしょうか。私が「私」と言うのは、「私」でない他者に対してです。他者に対して「私」を言わば押し出すために、私たちは「私」と言います。そしてそのとき、私たちは自分を指さしつつ「私」と言います。「私」には、つねに、ふり返られる「自己」が伴っています。しかしそのふり返られた「自己」は、すぐに他者に対して、「私」という主語として、また「考える者」という述語として押し出されます。そのとき、ふり返る「私」、あるいは「私は考える者である」と言う「私」

は背景に退きます。

⑬ つまり、「私」はつねに二重化することになります。上田閑照が『私とは何か』(二〇〇〇年)で使っている言葉を借用すれば、「有る私」と「無い私」とがつねに寄り添いつつ、しかし本質的に区別されたものとしてそこにあります。もちろん「有る私」のほうが、主語となり、述語となる私です。そしてそこから背景に退く私が「無い私」です。問題は私たちが往々にして、「有る私」を私自身と思い込んでしまうという点です。

⑭ 松浪もその点を指して、『哲学以前の哲学』の最後のところで次のように書いています。「私が私自身を何ものかとしてとらえようとするとき、私の手に残されるものは、私自身の正体ではなく、私の着古したマントでしかない」。⁽⁴⁾ 私たちはしばしば「自己」を反省すると言いますが、しかしそこに見いだされた「自己」は、私の抜け殻でしかないかもしれません。

(藤田正勝「哲学のヒント」(一部改変)による)

〔注〕 ヒューマニズム——人間の個性の自由な発達と、人間性の尊厳を

重んじる主義。

ハイデガー——ドイツの哲学者。

松浪信三郎——日本の哲学者。

レトリック——文章表現の効果を高めるための技法。

上田閑照——日本の哲学者。

〔問1〕「実存」という言い方をしましたが、この言葉が広く知られる

ようになったのは、それほど古いことではありません。とあるが、

②段落における「『実存』」の説明として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 「実存」とは、かねてからある哲学的概念であり、事物の「本質」と物が共存している状態を表している。

イ 「実存」とは、かねてからの哲学的なあり方を指し、物事の本質の意味を汲んで認識することを表している。

ウ 「実存」とは、かねてからの哲学を追究し、事実が本質的に存在しているかを検証することを表している。

エ 「実存」とは、かねてからある哲学における用語であり、物が実際に存在している状態を表している。

〔問2〕 つまり「実存」に先だつ「本質」は存在しないのです。とある

が、「実存」に先だつ『本質』は存在しない」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 人間が未来における自己を意識し努力することは、まず物や人が現実にあるという「実存」を認識して初めて成立するということ。

イ 人間として未来のあるべき姿を規定することが、人間が「主体」として生きるという最も重要な点を損なう可能性を生むということ。

ウ 人間としてあるべき姿を追求することよりも、人間にとって未来を意識しつつ「主体」として生きることが先に求められるということ。

エ 人間の自分らしい生き方は、他の何にも束縛されずに自分の意志で未来を切り開くという「実存」の概念により実現するということ。

〔問3〕⁽³⁾ ところが松浪は、この「私は考える、ゆえに私は存在する」というデカルトの第一命題を、自分であれば、「私は考える、ゆえに私は存在しない」と表現するだろうとこの『哲学以前の哲学』で書いています(一八六)。とあるが、「デカルト」と「松浪」の違いについて述べたものとして、最も適切なものを次のうちから選べ。

ア デカルトは、人間が私の存在を認めたときに他のすべての存在を疑うことができる考えたが、松浪は、自問自答する私は現に存在する私ではないため私の存在を肯定できないと考えている。

イ デカルトは、あらゆるものの存在を疑っている私の存在は疑うことができないと考えたが、松浪は、疑っている私は思考の対象には現れていないため存在していないと言えると考えている。

ウ デカルトは、あらゆるものの存在を疑っている私だけは確かに存在していると考えたが、松浪は、思考する私は存在していても思考の対象である私は存在していないと言えると考えている。

エ デカルトは、私を含むすべての存在を疑った結果あらゆるものが知の基礎として存在すると考えたが、松浪は、疑い思考する私の存在も不確かであるため存在を肯定できないと考えている。

〔問4〕⁽⁴⁾ 私たちはしばしば「自己」を反省すると言いますが、しかしそこに見いだされた「自己」は、私の抜け殻でしかないかもしれないかもしれません。と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 私たちが「自己」を反省するとき、ふり返る主体である「無い私」を認識せずに、主語や述語として他者に提示された「有る私」だけを思考の対象としてしまうから。

イ 私たちが「自己」を反省するとき、他者に対して「私」という言葉を用いて思考していても、他者に語る主体としての「有る私」を正しく認識できているとは限らないから。

ウ 私たちが「自己」を反省するとき、「有る私」と「無い私」を本質的に区別して私自身の正体を明らかにすることが目的となり、本来の反省するという目的を見失ってしまうから。

エ 私たちが「自己」を反省するとき、ふり返る対象である「無い私」を認識せず、主語となり述語となる「有る私」もなおざりにして常に昔の「自己」しか見つめていないから。

〔問5〕 本文の段落の構成について説明したものとして適切なものを、次のうちから選べ。

ア ①の段落を踏まえ、②・③の段落では、戦前と戦後における「実存」の意味の変化を述べているが、④・⑤・⑥の段落では、サルトルの「実存」の解釈は戦前と本質的に同義であることを論証している。

イ ⑧の段落では、⑦の段落で示した考え方を肯定しながら、「自己」は「主体性」というものでは語り尽くせないという明確な主張を述べて、後に反論していくための契機としての役割を果たしている。

ウ ⑨・⑩の段落では、デカルトの著作にある言葉を紹介するとともに松浪の考えも示し、⑪の段落では、松浪の考えについて詳しく説明することでデカルトと考え方が異なる理由を明確にしている。

エ ⑫の段落では、松浪の主張を踏まえて筆者が「私」とは何かという問いについて考えを深め、⑬・⑭の段落の上田閑照の「有る私」と「無い私」という考えと対比させることで結論を述べている。

〔問6〕

しかし、それは逆に、人間が自由であることをやめることができないうことでもありません。何かに寄りかかり、それに決断を委ねることはできないのです。すべてが自らの責任においてなされるのです。とあるが、「決断」を「自らの責任」でなすことの具体例を、あなたの体験や見聞に基づいて挙げ、それについて感じたことや考えたことを二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。や「などもそれぞれ一字と数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

芭蕉は教え諭すことばを、本や手記として残しませんでした。それでも、「芭蕉の俳論」といわれることばが、よく引き合いに出されます。それは、弟子が師の語ったことばを書きとってまとめたものが、後世に伝わったのです。いくつかあるうち、「去来抄」と『三冊子』の二作を代表とします。前者は京都の去来、後者は伊賀の土芳が整理・編集したものです。どちらも芭蕉が語ったことばを記録しながら、俳諧の基本や芭蕉の考えに迫ろうとしています。両書とも芭蕉の没後まとめられたもので、出版となると百年ほどのことになります。

まず『去来抄』からみていきます。内容にはいるまえに、去来のことをかんとんに紹介しておきます。一六五一年長崎に生まれ、一七〇四年京都で亡くなりました。姓は向井氏。もとは武士ですが、京都に来て学問をするとともに、俳諧に志し、芭蕉に入門、誠実な人柄もあって芭蕉から信頼されました。嵯峨に「落柿舎」という別荘をもち、芭蕉も滞在することがありました。最大の業績は、この『去来抄』の執筆と、『猿蓑』の編集にたずさわったことです。『去来抄』は、『猿蓑』編集時、芭蕉と直接交わした会話が多く盛り込まれています。このときの体験談という性格を色濃くもっており、独特の引き締まった文体によって、つよく訴える力があります。「先師評」(芭蕉と去来ら門弟と交わされた折々の会話録)、「同門評」(芭蕉を含めた一門の作品批評)、「故実」(俳諧の基本についての芭蕉の言論)、「修行」(芭蕉門の俳諧論についての議論)の四部仕立てになっています。

以下、『去来抄』にみえる芭蕉のことばをあげて最小限の解説を添え

ます。なお、配列に特別の意味はありません。

(2) 謂応せて何か有。

江戸の其角が、「下駄につかみ分ばやいとざくら」という巴風(其角の門人)の句を知らせてきたが、「どうおもうかね」と芭蕉がたずねられた。去来は、「枝垂桜(系桜)のようすをうまく言い表しているではありませんか」と応じました。一句は、みごとに咲いた系桜の下に臥せて、花の枝をつかんでたぐってみたい、といった意味です。そこで言った芭蕉の返答がこれです。物のすがたを表現し尽くしたからといって、「いいおおせて」、それがどうしたのだという批判です。ことばの裏側に、「余韻」とか「想像力」といった考えを置いてはどうでしょう。俳句にかぎらず、詩という文芸は、表面的な理解だけでわかった気になつてはつまりません。

舌頭に千転せよ。

これは去来の苦い経験に発することばのようです。「有明の花に乗り込む」とははじめの五・七をよんで、最後をどうするか悩んだことがありました。馬をよみ込みたかったものの、「月毛馬」「葦毛馬」と置いたり、あいだに「の」を入れたりしてみても、どうもうまくいかない。ところが友人許六(芭蕉の画の師になった弟子)の、「卯の花に月毛の馬のよ明かな」を目にして、なるほどとうなった。この手があったのか、と。許六は中の七文字に馬を置いて、すらりとよんだところ、去来はこだわって五・七を動かそうとせず、どうしてもうまくいかなかった

のです。常々芭蕉が、「口のなかで千回でも唱えてみよ」とおっしゃっていたのはこのことだったのだ。ほんのわずかの工夫でうまくいく。そこに気づくまで、「千転せよ」というわけです。去來の句は結局完成しなかったのでしょうか。

不易流行。

たいへん有名なことばですが、はたして芭蕉がそのまま口にしたかどうか、よくわかりません。でも、一門のあいだではいろいろと議論があったと、去來は言っています。「不易」とは永久に変わらないこと、「流行」とはつねに変化すること、「不易流行」というのは、まったく正反対のことを一語にまとめたことになります。*しよせつふんがえ諸説紛々だといいつつ、去來は、「不易流行の教えは、俳諧不変の本質と、状況ごとの変化という二面性を有するものだ」というのです。一貫性と流動性の同居、これが俳諧というものだというのでしょうか。

『三冊子』でも、「不易流行」に言及しています。そこでは、「師の風雅に、万代不易あり、一時の変化あり。この二つに究り、その本一なり」と、根本は同一だと説いています。そこで、つぎに土芳の『三冊子』をみてみましょう。

土芳は、伊賀上野藩士、一六五七年生まれ、一七三〇年没。姓は服部氏。若いころから芭蕉を慕い、伊賀の俳諧を盛り上げた人物です。『三冊子』は、芭蕉晩年の教えを書きとどめた書で、出版はずっと遅れるものの、多くのひとに筆写されて早くから広まりました。「白双紙」「赤双紙」「わすれ水」の三部をまとめて、『三冊子』として知られています。

す。

高く心を悟りて、俗に帰るべし。

俳句をよむ精神は目標を高くもつて、同時に日々の生活にいつも目を向けるように心がけなさい、という教えです。むかしのひとの作品や精神をしつかり学ぶとともに、生活する人びとの気持ちになつてこそ、すばらしい俳句が生まれるのだというのです。困難な事柄にひるまず勉強するうちに、いつか高尚なところを得ることができる。かといって、学問をひけらかしては嫌みなだけ。何気ない、ふつうに送る日常生活のなかから、俳句のおもしろさを発見することがだいじなのです。芭蕉の真髓は、この境地にこそあります。

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ。

とくにむずかしいことを言っははけません。松の真のすがたを知りたいのなら、よけいなことを考えず、ひたすら松のありさまにこころを寄せ、竹のことがわかりたいのなら、一心に竹の気持ちになるのがいい。おのれ本位ではなく、松や竹になり切るこそ、モノの本質を極める道だということです。私心を捨てて、そのものに身をゆだねる、ということです。

人間というものは、幼い時はただ無邪気にしたいだけのことをしていればいいが、成長するにつれて、欲が沸いてきます。他人に勝ちたい、いい点をとりたい、ほめられたいなど、俳句にはわざわざいとなる野心・邪心が生じやすくなります。これを克服するのは並大抵のことではない。

そこで芭蕉は、こんなことばも残しています。

俳諧は三尺の童にさせよ。

俳句というものは、三尺、つまり身の丈一メートルほどの幼い子にさせるのがいちばんだということです。無心だからです。生長に学びは欠かせません。一方で、ひとつの事柄に無我夢中になる気合もたいせつです。自慢や野心を排して、ひたすら俳句に打ち込むこと、それがおとなにとっては案外なしがたいことかもしれません。⁽³⁾芭蕉は、人間の心理をも見抜いていたようです。

新しきは俳諧の花也。

⁽⁴⁾「あたらし」という語は、少々厄介なことばです。古くは、惜しまれるほど立派で、すばらしい、の意味で、「惜し」の字をあてることがふつうでした。新鮮で見たこともないものは惜しまれることにもなり、やや遅れて「新しい」の意味でも用いられるようになったとされています。さらに、それに語尾がついて、「新しさ」や「新しみ」という名詞形ができてきたようです。単語の意味や使い方は時代によって変化していきます。これもそうした語のひとつで、辞書で調べてみることをお勧めします。ここではむしろ、新しいこと、新しい味わいをさしています。だれも試みていない境地こそが、俳諧の真骨頂だということです。

芭蕉は日ごろから、いにしえ人のこころや作品を俳句のよりどころにしてきました。古いことを尊ぶとともに、一方では、かつてなかった、斬新さを高く評価しました。目新しい俳句のすがたをみるとよろこび、

少々大胆な表現も厭いませんでした。⁽⁵⁾初心者のよいところを見つけようとしたのも、おなじ心情からだったのでしょうか。

行きて帰る心。

このとおりに芭蕉が語ったかどうかわかりませんが、土芳はあたかも直接耳にしたかのようにしていると思います。芭蕉の「山里は万歳遅し梅の花」という句について、前半では、元旦にくるはずの万歳（正月に祝い詞）をはやして回る二人組の芸人）もこんな山奥には遅れてやってくる、といったん言い切り、そのあと、山里でも梅の花は春になると咲くのですね、と反対のことをいった句だということです。「遅し」で止めてひとつの事柄を述べ、「梅の花」でそれとは逆のことという、それを「行きて帰る心」——行つて帰る精神と表したのです。どちらも事実でありながら、たがいにぶつかりあう面白さ、それこそ俳句の醍醐味なのだと言いたのです。わずか十七文字でもって、これだけのことを発信できる秘訣がこんなところにあるのです。

（藤田真一「俳句のきた道」（一部改変）による）

〔注〕伊賀——現在の三重県北西部の旧国名。

嵯峨——京都市右京区の地名。

其角——江戸時代の俳諧師。

月毛馬——赤味がかつた白い毛色の馬。

葦毛馬——黒・茶などの毛がまじっている白い毛色の馬。

諸説紛々——いろいろな考えが入りまじり、容易に真相がわか

らないさま。

〔問1〕⁽¹⁾ ながらとあるが、ここで用いられている「ながら」と同じ意味
・用法で使われている例文として最も適切なものは、次のうちでは
どれか。

ア 私の兄弟は三人ながら音楽が好きだ。

イ 私の学校には昔ながらの伝統がある。

ウ 山道を登りながら明日のことを考えた。

エ 運動を苦手としながらも最後まで走った。

〔問2〕⁽²⁾ 謂^い應^おせて何か有^あるとあるが、芭蕉がそのようなことばを残し

た理由を筆者はどのように述べているか。その説明として最も適
切なのは、次のうちではどれか。

ア 芭蕉は、俳句は見たままの様子をうまく表現したり説明したりする
ものではなく、「想像力」を働かせ「余韻」を味わうことを大切にす
るものだと考えているから。

イ 芭蕉は、俳句は目に見える物のすがたをうまく表現することよりも、
よんだときの気持ち「余韻」として伝わるような表現をすることの
方が大切だと考えているから。

ウ 芭蕉は、俳句をよむときに物のすがたを表現することばかりにとら
われていると、ことばの裏側にある「余韻」や「想像力」についてわ
かった気になってしまうと考えているから。

エ 芭蕉は、俳句は目で見た物をどのように表現するかという技術的な
ことよりも、聞き手がよみ手の気持ちを想像することの方が、俳句を
理解するには大切だと考えているから。

〔問3〕⁽³⁾ 芭蕉は、人間の心理をも見抜いていたようです。とあるが、芭
蕉が見抜いていた「人間の心理」の説明として最も適切なものは、
次のうちではどれか。

ア 人間は生まれながら野心・邪心をもっているが、成長するとさらに
強い欲が生じて無邪気なところで俳句を楽しめなくなるということ。

イ 人間は成長するとよけいな野心・邪心が沸いてくるが、学ぶことに
よって自然と高尚なところが得られるようになるということ。

ウ 人間は成長するにつれて野心・邪心が生じやすくなるが、ひとつの
事柄に身をゆだねることで私心を捨てるようになるということ。

エ 人間は成長するにつれて生じやすくなる野心・邪心を乗り越えがた
くなり、ひとつのことに無心に打ち込むのが困難になるということ。

(4)

〔問4〕「あたらし」という語は、少々厄介なやっかいことばです。とあるが、なぜ「厄介」だというのか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 「あたらし」は古くは「すばらしい」という意味で使われていたが、時代とともに「新しい」という意味に変化したため、正しく理解した上でことばを使うには辞書で意味を調べることが求められるから。
- イ 「あたらし」は本来「惜しまれるほど立派だ」という意味であったが、時代の流れとともに「新しい」という意味ももつことになったように、ひとつの意味に限定することができない単語であるから。
- ウ 「あたらし」は古くは「すばらしい」という意味であったが、やや遅れて「新しい」という意味が変わって名詞形もできたように、時代によって意味や用いられ方が大きく異なる単語であるから。
- エ 「あたらし」は本来「惜しい」という意味で使われていたが、時代が変わると新しい味わいという意味も含むようになったため、ひとつの意味に限定して使うには注意が必要な単語であるから。

〔問5〕

(5)

初心者のおいところを見つけようとしたのも、おなじ心情からだったでしょう。とあるが、どのような心情か。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 古さを尊ぶことを大切にするよりも、多少大胆でもかつてない斬新な表現を高く評価していこうとする心情。
- イ いにしえ人のこころや作品を俳句のよりどころにすることで、だれも試みていない境地を追究しようとする心情。
- ウ 目新しいものであれば多少大胆なものでも構わないとし、かつてない斬新な表現のみを評価しようとする心情。
- エ 古いことやむかしの人のこころを大切にすることにとどまらず、新たな境地を開拓していこうとする心情。

〔問6〕本文中の波線部A～Dの意味・内容について述べたものとして

適切なものを、次のうちから選べ。

- ア A そこで言った芭蕉の返答は、巴風の俳句についてたずねられた去来が、みごとに咲いた糸桜の枝をつかみたいという気持ちがあまく表れていると評価したことに対する芭蕉のことばを表している。
- イ B この手があったのか、と。は、俳句の最後をどうするかを悩んだ去来が、ことばを口のなかで何度も唱えることによって俳句がすらすらよめるようになるのだと気がついたことを表している。
- ウ C 芭蕉俳諧の真髓は、この境地にこそあります。は、芭蕉が俳句をよむ上で、むかしの作品や精神を学びつつ日常生活のなかでおもしろみを見いだそうとするように心がけていることを表している。
- エ D こんなところにあるのです。は、芭蕉の俳句の秘訣は対比的なことを並べながら事実に近づけつつ、わずか十七文字の中におもしろみを生み出すところにあることを表している。

